

### 3. 第14回国際ウイルス学会報告参加報告

入 江 崇

広島大学大学院医歯薬学総合研究科ウイルス学研究室

この度は、トルコ・イスタンブールで開催された第14回国際ウイルス学会への参加にあたり、日本ウイルス学会より学会出席旅費の補助を頂きありがとうございました。私の発表を推挙していただきました学会理事の皆様へ感謝申し上げます。

私はパラミクソウイルスのセッションで「Paramyxovirus Sendai virus C proteins are essential for maintenance of negative-sense RNA genome in virus particles」という演題の発表を行いました。(−)鎖RNAウイルスは、ウイルス由来のRNAポリメラーゼにより(−)鎖ゲノムRNAを鋳型としたウイルスmRNA及び(+)鎖アンチゲノムRNAの合成と、(+)鎖アンチゲノムRNAを鋳型とした(−)鎖ゲノムRNAの計二極性三種類のRNA合成を行います。(+)鎖方向のRNA合成効率は、ウイルス蛋白質合成の効率に影響します。また、細胞内ゲノム及びアンチゲノムRNAの合成比に依存した割合で、(−)鎖ゲノムRNAを内包した感染性ウイルス粒子だけでなく、(+)鎖アンチゲノムRNAを内包した感非感染性ウイルス粒子が産生されます。従って、効率良く感染性ウイルス粒子が産生されるには、これらのRNA合成が適切に制御されることが必要とされます。この制御は、全ての(−)鎖RNAウイルスで普遍的に必要とされるものであると考えられるにも関わらず、ほとんど研究が進んでいませんでしたが、今回、センダイウイルスの場合、アクセサリ蛋白質であるC蛋白質がその制御を担う重要な因子であることを報告しました。センダイウイルスのC蛋白質は200アミノ酸程度の小さい蛋白質ですが、驚くほど多機能な蛋白質で、宿主のIFN応答の阻害やアポトーシスの抑制、出芽の促進、ウイルスRNA合成阻害などの機能が知られています。セッションの

最初に、大御所であるDr. KolakofskyがC蛋白質の機能についてのoverviewを話して下さい、「C蛋白質の新しい機能がまた見つかった。これについて次の演者が話します。」と、続く私の発表に上手く繋いでくれたので、大分落ち着いて発表することが出来ました。発表後、フロアから「どうしてそんなに多機能なのか？」と質問されましたが、3年後には、これに答える発表が出来ればと思います。

これまでに国際学会には、3年に一度開催される“International Conference on Negative Strand Viruses (NSV)”に数度の参加経験がありますが、演題数が1,000に迫る大きな規模の国際ウイルス学会への参加は今回が初めてでした。NSVの様な分野の狭い学会では、自分の研究内容に近い関連分野の最新の情報や人に密に触れることが出来る利点ありますが、様々な分野のウイルス研究者が集まる国際ウイルス学会に参加してみて、各セッションでは関連分野の世界の研究者たちと最新の情報の交換が出来るだけでなく、いろいろなセッションに足を運べば、自分とは異なる分野の最新の研究内容やアプローチを知ることが出来、非常に有意義でした。

開催地であるイスタンブールはとても季候が良く、トルコ料理は世界の三大料理に挙げられているだけありとてもおいしく、人も明るく優しく、滞在中はとても楽しく過ごすことが出来ました。学会運営もトルコ人気質を表しているのか、とても大らかなものでした。自分の発表日時の連絡も直前まで来ず、発表時間の配分が分からないため、セッションの時間を演題数で割っておそらく10分くらいだろうと予想して準備しました。発表データを預ける場所もプログラムには記載されておらず、私はたまたまその場所を見つけて預けることが出来たのですが、これについては一日目午前のシンポジウムの終わりにChairの一人であるDr. Lambが、早速午後から始まるセッションの発表者に向けてアナウンスしていました。また、プログラム集、要旨集ともに、索引の重複、脱落が多く、発表の要旨が他人のものに置き換わっていることもありました。会場の構造が複雑であったにも関わらず、セッション会場の地図もなく、会場間の移動もとてもとまどいました。例年は、この様なことは無いそうなので、きっとトルコ人気質によるものな

#### 連絡先

〒734-8551

広島大学大学院医歯薬学総合研究科ウイルス学研究室

TEL: 082-257-5157

FAX: 082-257-5159

E-mail: tirie@hiroshima-u.ac.jp

のでしょう。こう書くと、とてもひどい学会だったように思われるかもしれませんが、少なくとも私にとっては、以

外にこれがゆったりした雰囲気を与えてくれ、初めての国際ウイルス学会を楽しむことが出来ました。



写真：同じ研究室の坂口准教授（右）と。